



「杉弘相書状」(浦家文書巻 1)

いやす
なおす
たもつ



文書館資料にみる
病気・医療・健康

13

身を保つ①

戦国時代のプラセンタ

室町・戦国時代に西中国～北部九州一帯を支配した大内氏。15世紀後半～16世紀初頭に安芸国（現広島県西部）の内、大内氏の影響下にあった地域を統括していたのが、大内氏の有力家臣であった杉弘相です。

某年 7 月 27 日、杉弘相は安芸国人の乃美備前守に対して手紙を送っています（上の写真）。内容を意識すると、以下のようになります。

「もう一度申します。混元丹を一貝差し上げます。委しいことは宮内兵庫助が親しく申すでしょう。それにしてもあなたの戦場での御高名は手紙に書ききれられるものではありません。」

この手紙によって乃美備前守に贈られたことがわかる「混元丹」とは、いったい何でしょうか？

「混元」は、哺乳動物の胎盤、つまり健康成分として最近話題を集めているプラセンタのことです。胎盤は、胎児と母体をつなぎ、血液、酸素、栄養などの

補給から老廃物や炭酸ガスの排出まで、胎児が成長するのに必要なすべての機能を持っています。さらにホルモンを分泌するほか、毒物など無用な物質の侵入から胎児を守る役目も果たしています。このような胎盤の持つ不思議な力は、古くから知られていました。

そして「丹」には、もともと赤いという意味があり、また練薬や丸薬の名前によく使われます。

したがって、「混元丹」とは、プラセンタを配合した赤色の練薬または丸薬だったと考えられます。これが「一貝」、つまり容器としての貝殻一つに入っていたわけです（解説シート 19 参照）。

杉氏は、乃美備前守の合戦での高名を祝って、肉体疲労や滋養強壮に効果のある「混元丹」を贈ったのでしょう。

ちなみに、江戸時代の加賀国（現石川県）では、「混元丹」は人々の生活にかかせない民間薬だったようです。



現在作られている「混元丹」には、プラセンタをはじめ 18 種類もの生薬が配合されています。

具体的には、ジャクジュツ、ニンジン、ゴウ、コウブシ、コウボク、オンジ、アンナカ、ゴシュユ、タルク、梅花、ガジュツ、シュクシャ、ブクリョウ、キキョウ、カンゾウ、モッコウ、オウギ、サンヤク、天竺黄などの生薬の成分が含まれています。

形態は、水飴状のタイプと粉状のタイプとがあり、前者は赤い色をしています。

虚弱体質、肉体疲労、食欲不振、胃腸虚弱、病中病後の滋養強壮などに良く効くとされます。

杉弘相書状



重而申候、**混元丹**一貝

進之候、委事懇ニ

宮内兵庫助申候、さてもく

御高名難尽筆候、

恐々謹言、

七月廿七日

弘相 (花押)

乃美備前守殿

御陣所

文書の右端を下から切って作った紙紐を、奥から折った本紙に巻いて締封をする。その封じ目に引いた墨の痕。



薬を入れる容器としての貝殻
(解説シート 19 参照)